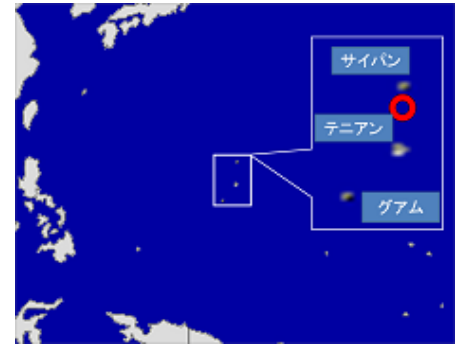


# 佐藤孝則さん

1930(昭和5)年生まれ  
埼玉県で収録  
民間人  
テニアン島



## ●1933(昭和8)年 一家でテニアン島に移住

南北 20 キロ、東西 10 キロの小島。緑が多くて、海はエメラルドグリーン、子供にとって天国だった。太平洋戦争開戦後半年たたないうちに、南方にいく日本の船はどんどん沈められた。親父はいろんなうわさを聞いて、今引き上げるのか、島に留まるのかを迷った。結局、留まった方が安全との判断だった。

## ●1944(昭和19)年6月11日～ 空襲は激しくなり、艦砲射撃が始まる

洞窟に隠れる。砲撃が一段と激しくなり、日本の対空砲も激しく応戦したが、反撃したところが攻撃され一日で終わった。一番恐怖を感じたのは 5 キロ先のサイパンから打ち込まれる巨大な砲弾で、偵察機が上に来たら危ない。

## ●1944(昭和19)年7月24日 米軍上陸、島内を逃げ惑う

第2洞窟に移動した。民間人も兵隊も追い詰められた地点が一緒ですからね。「死ぬんだね」「死ぬもんだ」とみんな思っていた。

お袋は食料を考えた。持ち運びも考えないといけない。かつおを茹でて、乾かして、子供が背負った。5-6本持ち歩いた。

洞窟にこれが最後だと兵隊が集まっている。どうやら最後の突撃だとのことらしい。落ち着かない。銃を空に向かって撃っている兵隊もいる。洞窟の中に入ってきて、「私がここで死んだということを遺された妻子に伝えてくれ」と言ってきた。写真とかを渡してくる。

親父が一家を集めて、「死ぬのはいつでも死ねる。アメリカ兵を見てからでも遅くない」。みんなこの家庭でもいつでも死ねるように爆薬を持っていた。親父が爆薬を捨てて、逃げるように家族に伝えた。

## ●1944(昭和19)年8月2日以降(玉砕以降) 祖母と幼子が衰弱死

井戸を目指して島内を移動するが、途中、祖母と生後 2 ヶ月の弟が衰弱死した。

弾の音は遠いときは、ヒュー。シャツ、シャツと音がすると近くに弾が来ている。サイパンから砲弾も飛んでくる。破片が友人の首に刺さって死んでしまった。私も足に傷を受けた。

喉がからからで、水が欲しいけど、何故かこのタイミングで雨が降らない。仕方ないから海水を飲むが、余計に喉が渇く。スピーカーで米軍が「水もある、食料もある」と洞窟に向かって放送している。100メートルあまりの断崖絶壁から荒波打ち寄せる波に飛び降りる人もいるし。月明かりの林の中を移動中、家族とはぐれた。

1人で行動した。そのうち雨が降って、とてもおいしい水だった。そこで眠り込んだ。日本兵と出会い、鉄兜に米を入れて炊いてくれた。一口食べ終わったくらいか、米軍の手榴弾が飛んできた。熱い破片が左膝に刺さった。迫撃砲がどんどん飛んできて、兵隊さんと左右に逃げる。

米軍が掃討作戦を始めていて、洞窟という洞窟を探っていた。自分がいた洞窟は、小さな入り口に大きな石が落ちて4人が、閉じ込められた。夜になると石を外から外してくれる人がいて助かった。行き場は海しかなかった。洞窟の石をどけてくれた人は頭がおかしくなっていた。隠れましょうといっても通じない。銃声がして、彼が撃たれていた。私は今も生きて、その人が死んでいる。

食料がなく、非常線を超える。米兵に遭遇して撃たれ、右太腿を負傷。食料は米軍の塹壕跡や、ゴミ捨て場に求めた。コンビーフの缶詰が埋まっていた。日中の行動は危険なので、サトウキビ畑で隠れている。米兵はサトウキビ畑を焼討ちすることがあって、煙の流れる方向に苦しいけれど逃げる。日本軍の迎えを信じて生きていた。

## ●1945(昭和20)年1月頃 収容所へ

一緒に生活していた敗残兵が投降のやり方を教えてくれて別れた。棒に白い布をつけて投降。収容所で家族と再会することができた。

## ●1946(昭和21)年2月 日本に帰国

(取材日: 2006年7月16日)